

## 本居宣長の本歌取論—『新古今集美濃の家づと』評釈を通して

藤井 嘉章

### The Theory of Honkadori of Motoori Norinaga —Through the Interpretation of *Mino no Iezuto*—

FUJII Yoshiaki

#### Abstract

This paper aims to make clear the diversity of the way of Honkadori (allusive variation) interpreted by Motoori Norinaga in his commentary book, *Mino no Iezuto* and to place the result within his system of interpretation of the Japanese classics.

By comparing Ishihara Masaakira's way of the interpretation of Honkadori, Norinaga's way can be roughly identified with "Honkadori to take the meaning" rather than "Honkadori to take the words" by Masaakira. We can analyze the way of his interpretation of Honkadori into 9 factors: (A)to change the meaning of the words of Honka (existing poem) and to utilize it in the new one; (B);to change the view at Honka (C);to share the poetic world and to change the topic of Honka (D) to reply to Honka; (F)to exchange the words of Honka into the ones of the same category;(skip (E),) (G)to take two Honka; (H)to associate the words of Honka with Engo (a related word in classical Japanese poetry); (I)not to change the meaning of the words or the whole poet and (J)to pick up the meaning of the words that aren't taken as Honka.

This result gives us the hypothesis that Norinaga's way of the interpretation also includes the dimension of flexibility and he regards as important the order of the language in Waka, or Japanese poetry mainly depending on Engo.

#### Key Words

Motoori Norinaga, Mino no Iezuto, Honkadori, Hermeneutics, the order of language



## 目次

- 一、本稿の目的と方法
- 二、『美濃の家づと』における本歌取解釈の諸相
- 三、本居宣長本歌取論の古典解釈一般に占める位置
  - 三・一、過度な論理的一貫性という評価への反例
    - ― 心と詞の対立軸から
  - 三・二、詞の秩序の重視
    - ― 心を取る本歌取と縁語的連想による本歌取を通して
- 四、結論

## 一、本稿の目的と方法

本稿は、本居宣長が本歌取という和歌の一技法について、具体的にいかなる解釈態度を持っていたのか、さらにその解釈態度は彼の古典解釈全体の中でいかなる意味を持つのかを究明することを目的とする。そのために『新古今和歌集』への注釈書である『美濃の家づと』（以下『美濃』）において本歌取歌として解釈されていると認め得る一七一首から本歌取解釈の諸相を析出することを試み、さらにその解釈の諸相が持つ意味を考察する。

本居宣長の本歌取解釈の特徴に関して、高橋俊和は「本歌の詞を本歌の中の意味・情を含んだものとして採用するという本歌取りの態度」であると述べている。具体的な検討は本論に譲るとして、このような規定は宣長の評釈中における言葉に如実に表れている。

「かの朝臣（発表者注：在原業平）の心にてよめる歌」

（春上・藤原家隆・四五）

「古歌に〈中略〉とあるを、心にもちて」

（春上・藤原俊成・五九）

「本歌のごとく」 （春下・俊成卿女・一四〇）

「本歌の下句の意をもちて」 （雑下・藤原家隆・一七六一）

右のような評釈が示す通り、宣長の本歌取解釈は基本的には、本歌の意味内容を新歌に積極的に読み込んでいくものであると言うことができる。このような本歌取解釈に対して、宣長門弟である石原正明は『尾張廻家苞』（以下『尾張』）において、対立する見解を表明している。いま寺島常世の言を借りれば正明にとって「本歌取は詞をとる技法であり、それ以上の複雑な技巧は否定される」<sup>2</sup>。以上の規定の妥当性は同様に『尾張』の評釈中に見られる正明自身の言葉からも窺える。

「本歌は詞計をとるなり」 （春下・俊成卿女・一四〇）

「本歌は詞ばかりをとれり」 （夏・後鳥羽院・二三六）

「古歌をとるは古哥の詞をとる也」 （秋上・俊成卿女・三九一）

「古哥はたゞ詞ばかりをとるなり」

（秋下・式子内親王・五三四）

このように異なる二つの本歌取観を「心を取る本歌取」と「詞を取る本歌取」という対立軸として提起しておきたい。無論本稿の主題は宣長の本歌取論であるので、「心を取る本歌取」を重視するとみなされる宣長の本歌取論は、具体的にはどのような内実を有しているのか、ひいてはその内実を明らかにした上で、宣長の本歌取に対する態度として「心を取る本歌取」という規定が妥当か否か、が問われることになる。以下、第二節において宣長の本歌取論の内実を記述し、次いで第三節ではそれを踏まえ、その本歌取論が彼の古典解釈においていかなる意味を持つのかを考察する。その際、第三節第一項では、宣長の古典解釈態度に対する、論理的一貫性と柔軟性という先行研究上における評価の対立軸を用いて検討する。同第二項では、一方で宣長の古典解釈態度に対して与えられている詞の秩序の重視という観点から考

察する。

さて、本論を始めるにあたってもう一つ整理しておかなければならない事柄がある。それは本歌取に関する宣長以前の伝統的な歌論歌学書における諸言説である。宣長の本歌取論は当然、彼単独で成立してきたものではないこと、さらに先行言説との対比を通じて、宣長本歌取論の特徴をより鮮明に提示し得ること、この二点を考慮したとき、先行する本歌取言説をあらかじめ整理しておく必要がある。とはいえ和歌的伝統における本歌取言説の全面的な整理は本稿の目的を逸脱している。ここでは、宣長の蔵書を通覧できる筑摩書房版全集第二〇巻所収の「宝暦二年以降購求謄写書籍」及び「書目」中に見える歌論、歌学書のうち、本歌取に特に言及しているものから、本歌取言説に関する内容を抽出したものを図表化して示すにとどめる<sup>3)</sup>。

上下の句の置換	無、井、愚、悦、庭、手、近、毎
詞の同系統の語句への言い換え	八、悦
字句の伸縮	悦、庭
本歌の明示	無、庭、手、毎
摂取量の上限	八、詠、庭、耳、毎
部立の変更	詠、手、毎
本歌の心を変えない	八、耳
序詞・枕詞を含む句の摂取	詠、近
主題・構想の中心の詞は取らない	無、八、詠、手、近、毎
本歌取可能な時代	庭、東、耳、近
本歌の詞の意味内容を変える	井、愚
本歌に贈答する歌	井、愚
本歌にすがって風情を建立する	井、愚、耳
本歌の作者になりきって新たな趣向を詠む	井、愚
本歌の詞の一部を利用する	井、愚
本歌二首を取る	井

上図のように先行する本歌取言説を見ると、大きく分けて本歌取の形式的な規定と、内容に即した規定のあることがわかる。ここであらかじめ述べておけば、『美濃』における本歌取解釈を通覧すると、本歌取解釈に関しては内容的な規定に関する言及が主である<sup>4)</sup>。そして本歌取に関する先行言説を見ると、頼阿による『井蛙抄』『愚問賢注』が、本歌取の内容的な規定に重点を置いていることがわかり、実際に宣長の本歌取解釈を大きく規定している。宣長の本歌取論の輪郭を描く際には、『美濃』以外に、彼の初期の和歌注釈書である『草庵集玉箒』（以下『玉箒』）も参照することができる。当然これは『井蛙抄』『愚問賢注』の著者である頼阿の私家集『草庵集』に対する注釈であるが、本稿に先立ち筆者が『玉箒』における本歌取解釈を分析した結果、以下のような本歌取解釈の諸相を抽出することが可能となった<sup>5)</sup>。

- (A) 本歌の詞の意味内容を変容させて新歌に利用する本歌取
- (B) 本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取
- (C) 本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取
- (D) 本歌に応和する本歌取
- (E) 心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取
- (F) 本歌の詞を同系統の別の詞に置き換える本歌取
- (G) 本歌を二首取る本歌取
- (H) 縁語的連想による本歌取
- (I) 本歌の趣向を変えない本歌取

これらの枠組は頼阿『愚問賢注』における「本歌のとりやう」を主要な参照軸としながら、『玉箒』における本歌取解釈の内実に即して得られたものである。本稿ではまずこの枠組を基準として、その適応可能性を見極めつつ、『美濃』における本歌取解釈の内実を記述していきたい。

なお、あらかじめ注意しておくべきことは、以下で示される本歌取

解釈の諸相を、いわゆる本歌取分類と見なすべきではないという点である。分類とは、特定の基準によって対象を相互に重なりを持たない対立的な枠組へと腑分けしていくことに他ならない。しかし宣長の本歌取解釈を具体的に見れば、一首の本歌取歌の解釈に、重層的な本歌取の視点を見出していることがわかる。それゆえ宣長の評釈の内に見出し得る本歌取解釈は、本歌取の分類基準として見るのではなく、本歌取歌を解析するための分析的視点として理解するべきである。

## 二、『美濃の家づと』における本歌取解釈の諸相

### (A) 本歌の詞の意味内容を変容させて新歌に利用する本歌取

(A)として立項したものは、本歌から撰取した詞の意味内容を変えて新歌に利用するものである。この規定に沿う本歌取解釈を示している用例を挙げよう。便宜上、新歌である新古今歌の直後に本歌を掲載する。以下同様。

#### 五十首歌奉りし時

さくら花夢かうつ、かしら雲のたえてつれなき峯の春風（春

上・藤原家隆・一三九）

本歌

風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か（古今・

恋二・壬生忠岑・六〇一）

めでたし、本歌<sup>云々</sup>しら雲のたえてつれなき君が心か、たえては、上よりは、白雲の絶たる意につゞけきて、たえてつれなきは、俗言に言語道断のつれなき風ぞ、といふ意にて、つれなく花をちらしたることを、深く恨みたる也、二の句、一夜のほどなどに、俄に散たるさまなり、さて又、しらずをしら雲へいひかけ、又峯の花は、白雲と見ゆる物なれば、白雲の絶るは、散たるよし也、されば白雲の絶てといへるは、本歌の詞なるを、本歌になき趣を、

かくさまぐこめられたるほど、いとたくみなり、

この評釈において「本歌の詞の意味内容を変容させて新歌に利用する」というのは、具体的には、本歌の「白雲」が、新歌では「しらず」の掛詞として撰取されていることを意味することになる。試みに本歌である古今歌の宣長による解釈を『古今集遠鏡』（以下『遠鏡』）の俗語訳から確認すれば「上サテく<sup>（類）</sup>ルキモノイケシカラヌキツヨイ君ガ心カナ」となり、本歌における「白雲」は「たえて」を導く序詞として解釈されていることがわかる。一方で『美濃』の解釈においては「しらずをしら雲へいひかけ」と言うように、新歌の「しら雲」には、「しらず」が言い掛けられ、「絶えて」には、「しら雲」に見立てられた「さくら花」が散ってしまうという景が読み込まれる。それを「されば白雲の絶てといへるは、本歌の詞なるを、本歌になき趣を、かくさまぐこめられたるほど、いとたくみなり」と述べるのである。

同様な解釈を示しているものをもう一首挙げよう。

#### 更衣

散はてて花のかけなき木ノ本にたつことやすきなつ衣かな

（夏・慈円・一七七）

本歌

けふのみと春をおもはぬ時だにも立つことやすき花のかけかは

（古今・春下・凡河内躬恒・一三四）

めでたし、本歌<sup>云々</sup>けふのみと春を思はぬときだにもたつことやすき花の陰かは、三の句、木ノ本はといふべきを、にといへるは、夏衣をたつ方をむねとせればなり、はといひては、衣のかたにうとし、四の句は、本歌の意とむかへて、今はたつことやすきなり、さて又月日はやくうつりて、夏になれる意をも、かねたるべし、本歌にては、たゞ花の陰の、立さがたき意のみなるを、かくとりなして、三の意をかねたるは、此集のころのたくみのふかき

なり、

まずは和歌の内容面の解釈を見ると、「本歌の意とむかへて」と言うように、時間を春から夏へと進めて、春には立ち去りがたかった「花の陰」も、夏になった今では容易に立ち去ることができる、という解釈である。本歌における春の日の立ち去りがたい花陰という詩的世界から、時間の経過を通して「たつことやすき」という新歌の詩的世界との連なりを示す解釈で、後に「(C)本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取」として立項する枠組としての解釈を示している。

その上で本項目における重要な視点は本歌における「立つ」に加えて、新歌では時が「経つ」と衣を「裁つ」との、三つの意を「たつ」が兼ねている、と見ている点である。以上を踏まえて「本歌にては、たゞ花の陰の、立さがたき意のみなるを、かくとりなして、三つの意をかねたるは、此集のころのたくみのふかきなり」という言葉が示すように、この種の本歌取を大いに評価していることが出来る。

#### (B)本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取

これは撰取した本歌の詞の意味内容を引き継ぎつつも、新たな視点から詠んだ本歌取と言えるようなものである。

#### 水無瀬恋十五首歌合に

草枕むすびさだめむかたしらずならはぬ野べの夢のかよひ路  
(恋四・藤原雅経・一三一五)

#### 本歌

よひよひに枕さだめむ方もなしにねし夜か夢に見えけむ  
(古今・恋一・読人しらず・五一六)

上句は、本歌へよひ／＼に枕さだめむかたもなしにねし夜か夢に見えけむ、とある四の句は、いづ方にいかに枕をして寐たりし夜かといへる意也、こゝの意は、今までねならず、方角もし

らぬ野べなれば、枕を定むべき方もしられずと也、結句は、故郷の夢を見まほしく思ひての歌なれば也、通路、野べによし有、歌のおもては、たゞ旅宿の意なれ共、本歌によりて戀にはなる也、三の句いうならず、

本歌である古今五一六番歌の宣長による解釈を『遠鏡』の俗語訳を通して見ると

イツヅヤ恋シイ人ヲ夢ニ見タコトガアツタガ 其夜ハドチラ枕ニ  
ドウシテ寝タ時デアツタヤラ 思ヒダシテミレド覚エヌ ソレ  
デ此ゴロモ毎晩／＼ドウゾ又夢ニ見ヤウト思ヘド ドチラ枕ガ  
ヨカラウヤラ定メウヤウガナイ

のように、恋人を夢に見るために枕をその方角へと向けようとする趣意であり、新歌では、故郷の夢を見るためにその方角へ枕を向けようとする趣向へと視点が変更されている。なお、恋部に配列されていることもあり、「歌のおもては、たゞ旅宿の意なれ共、本歌によりて恋にはなる也」と述べているように、本歌の恋という主題も引き継いでいると考えられている。

なお、宣長の「本歌によりて戀にはなる也」という解釈を、『尾張』の石原正明はこの一三一五番歌を羈旅歌であると想定し、「古歌は詞ばかりをとる物なれば、それよて恋の歌とならん事心えず」と反論している。すなわち、正明にとって本歌取とは「詞ばかりをとる物」であるため、本歌において恋が詠まれていようとも、新歌ではその内容を引き継がないと考えているのである。

同様の解釈を示している例として、

#### 夏のはじめのうた

をりふしもうつればかへつ世の中の人のこゝろのはなぞめのそ  
で(夏・俊成卿女・一七九)



## 本歌

色見えでうつろふ物は世中の人の心の花にぞ有りける (古今・恋五・読人しらず・七九七)

世中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞありける (古今・恋五・小野小町・七九五)

めでたし、本歌へうつろふ物は世の中の人の心の花にぞ有ける、  
 へ世中の人の心は花染の<sup>云々</sup>、初二句は、人の心のかはりやすき  
 ことは、男女の中のみならず、をりふしのうつるにも、うつりか  
 はるよといへるにて、花染衣をすてて、夏衣になれることをいへ  
 る也、

『美濃』は本歌で詠まれる男女の仲の移ろいやすさを思いつつ、新  
 歌では一転、その視点を季節へと向けて、季節の変化とともに「花染  
 衣をすてて、夏衣になれる」という点に一首の趣向を見出している。

『尾張』との対照を見れば、『美濃』は「初二句は、人の心のかはり  
 やすきことは、男女の中のみならず」というように、本歌に詠まれる  
 男女の仲をも新歌に読み込んでいたが、この評釈の部分に正明は「此  
 一句不用也。本歌の如く云々と説る、うつりにて、むつかしく、入ほ  
 がなり」として、宣長の心を取る本歌取を否定している。そして『尾  
 張』では新歌の趣意を「折ふしのおしうつれば、世中の人心迄がおし  
 うつりて、花染の袖を、夏衣にかへたと也」として、本歌の男女の仲  
 を読み込まない解釈を打ち出している。

## (C) 本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取

このタイプの本歌取は、新歌の詩的世界が、本歌の詩的世界に依存  
 してはじめて存立するものということができる。言い換えれば、一首  
 の詩的世界内の時間的空間的繋がりととして本歌の詩的世界を必要とす  
 る本歌取である。

## 千五百番歌合に

今こむと契りし事は夢ながら見し夜ににたる有明の月 (恋四・源通具・一二七六)

## 本歌

今こむといひしばらくりに長月のありあけの月をまちいでつるか  
 な (古今・恋四・素性・六九二)

めでたし、下句詞めでたし、本歌へ今こんといひしばらくりに<sup>云々</sup>、  
 とよめる時の意にて、有明の月をまち出て見てよめる意也、かや  
 うに見ざれば、初句の詮なし、夢ながらとは、跡もなく夢の如く  
 になりぬれどもといふ意也、見し夜とは、逢し夜といふ意なるを  
 夢の縁の詞にて、見しといへる也、

「本歌」とよめる時の意にて」というように、『美濃』の解釈では、本  
 歌が詠まれたときに作中主体が見ていた有明の月を、後日再び見なが  
 ら詠んでいるものとする。この解釈において重要な点は、本歌の詩的  
 世界の時間的空間的延長上に新歌の詩的世界が成立しているという点  
 であり、いわゆる後日談的な本歌取としての解釈であると言えよう。  
 この解釈に対して正明は「本歌は詞をとるもの也。それを詮とてかく  
 むつかしくとる物にはあらず」と執拗に自らの「詞を取る本歌取」の  
 論理を対置している。

また、

刑部卿頼輔が歌合し侍けるに、よみてつかはしける

きく人ぞなみだはおつるかへるかりなきてゆくなる明ぼのそ  
 ら (春上・藤原俊成・五九)

## 本歌

なきわたるかりの涙やおちつらむ物思ふやどの萩のうへのつゆ  
 (古今・秋上・読人しらず・二二二)

めでたし、下句詞めでたし、初二句、よのつねならば、きく人も涙ぞおつるとよむべきを、かくよめる、ぞもじはもじのはたらきに心をつくべし、四の句は、うちひらめなる詞なれ共、此歌にてはめでたく聞ゆ、すべて同じことも、いひなしと上下のつゞきからによりて、よくもあしくもなるわざぞかし、古歌に「鳴わたる鴈のなみだやおちつらんとあるを、心にもちて、今は鳴て別れゆく鴈なる故に、聞人ぞかなしくて、其涙はおつるとなり、

冒頭にも示したように、この評釈部分で『美濃』は「古歌に……とあるを、心にもちて」という表現を使う。秋に北方より飛来した雁が涙を流していたのだろうかとする本歌の詩的世界の時間的連続として、春にまた北方へと飛び立つ雁が鳴くのを聞く人もまた本歌で雁が流していたのと同じように涙を流す、という解釈である。正明は「古歌とは、鳴わたる雁の涙や落つらん物おもふ宿の萩の上の露とみえたる也。それを心にもつとは、泪といふもじ、啼といふもじの似たる故にや。なく物に泪をよむ事は、一向平生の事にて、いづれの歌によれりといふべきほどの事にはあらず」と述べ、古今二二一を本歌をそもそも本歌として認めない立場を取る。

#### (D) 本歌に応和する本歌取

この規定に含まれる具体的な本歌取は、本歌に対して新歌が返歌として詠まれている場合、また本歌の疑問に対して新歌で答えている場合、さらには『和歌用意条々』における「古歌に贈答したる体あるべし。有りといふに無しといひ、見るといふに見ずといへる、是也」のように本歌に対立する意味へ言い換えている場合である。

#### 題しらず

今こむとたのめしことをわすれずは此夕暮の月やまつらむ（恋

三・藤原秀能・一二〇三）

#### 本歌

今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな（古今・恋四・素性・六九一）

あしひきの山よりいづる月まつと人はいひて君をこそまて（拾遺・恋三・柿本人磨・七八二）

本歌へ今こむといひしばかりに長月の<sup>云々</sup>、こ、の歌は、本歌をうちかへして、こなたよりたのめおきしことと聞ゆ、さるはちかきほどに参らむとたのめおきつれども、さはり有て、えゆかぬにつきて、こよひなどは、其人の必我を月出ば来むとまちて、月の出るをまちやすらむと、おもひやれる也、又結句は「月まつと人はいひて」<sup>云々</sup>の意によりて、たゞに我をまちやすらんの意にもあるべし、たのめしを、あなたよりたのめたるにしては、下句おだやかならず、

第一の本歌である古今集六九一番歌が女の立場から、契を交わした男の訪れを待つ歌であったのに対し、新歌では、「こ、の歌は、本歌をうちかへして」と言うように、その約束した男が女のもとへ行こうとしても、行けない状況の中で、自分を待っているであろう女に、思いを寄せる歌として解釈されている。正明は新歌の趣意としては『美濃』の解を支持してはいるものの、やはり先に挙げた『美濃』の「こ、の歌は、本歌をうちかへして」に対して、「かくむつかしくいはずとも、本哥はたゞ詞ばかりをとれる也」という主張をしている。

次は、本歌の詞を対立する意味へと詠み換える場合を見よう。

#### 百首歌奉りし時

聲はして雲路にむせふほと、ぎすなみだやそ、くよひの村雨

（夏・式子内親王・二二五）

#### 本歌

声はして涙は見えぬ郭公わが衣手のひつをからなむ（古今・夏・

読人知らず・一四九

本歌へこゑはしてなみだはみえぬほと、ぎす<sup>云々</sup>、このうたにては、初句のはもじは、こゝろなし、たゞ本歌の詞によれるなり、雲路、むら雨によせあり、むせぶは、なみだのむせぶにて、むせぶほと、ぎすのなみだといふつづきなり、一首の意は、本歌には、なみだは見えぬとあれ共、此むら雨は、其涙のそゝくにやあらんと也、

ここでは一首の意に、宣長の本歌取解釈のありようが直接的に示されている。「本歌には、なみだは見えぬとあれ共」と言つて、新歌における村雨は、本歌では泣いていなかったほととぎすが注いだ涙ではないのだろうか、という解釈である。

#### (E) 心中の歌境を詠出するため本歌の詞を利用する本歌取

この項目として立項した本歌取は頼阿『愚問賢注』の「本歌のとりやう」で第五に掲げられている「たゞ詞一つをとりたる歌」と対応させて考えることができ、宣長の解釈中では具体的に『続草庵首玉簪』の秋冬部、二六一番歌においてなされていたようなものである。心中に浮かんだ歌境を詠み出すためのいわば梃子として、本歌の詞を部分的に使用するとも言える本歌取であるが、管見の限り『美濃』の評釈中はこの種の本歌取解釈を見出すことはできない。

#### (F) 本歌の詞を同系統の別の詞に置き換える本歌取

この本歌取は『玉簪』春上、一〇八番歌の解釈に典型的に見られるような詞の置き換えによるものである。いまその例を見ると、

入道前太政大臣家三首春月

春のよの月のかつらに咲花も空に見えてや猶かすむらん(草庵集、春上、一〇八)

〔諺解〕評釈省略

○古今忠岑「久かたの月のかつらも秋は猶紅葉すればやてりまざるらん。此歌より出て。秋を春にとりなほして。紅葉を花にかへてりまざるをかすむにかへたる也。かやうに本歌をとるも一の様也。まづかの本歌の心は。天上の月の桂は。此界の草木のやうにもみぢするなどいふ事はあるまじきわざなるに。それも秋はやはり此界のごとく紅葉すればにやてりまざるとよめる也。今の歌も其心にて。天上の月の桂に咲花も。やはり此界の花のごとく。雲と見ゆればにや。かくのごとく春はかすみて見ゆらんと。かすめる月をさしてよめる也。雲と見えてかすむとは。此界の花の。遠山などに咲るが。雲と見えてかすむ物なる故に。月の桂の花もやはりその如くと也。

ここでは一方を省略したが、宣長は二種の解を提示している。一方は本歌に依らない解であり、もう一方は宣長自身が示す本歌に依る解である。今、後者のみ検討する。それは古今、秋上、一九四番、壬生忠岑歌を本歌として、本歌の詞を同系統の別の詞に言い換えた新歌であると見る解である。「秋」を「春」に、「紅葉」を「花」に、「てりまざる」を「かすむ」と詠みなすことで、本歌の、紅葉しないはずの天上の月の桂が、秋になり地上と同じように紅葉したために、月が照り冴えているのだろうか、という趣意から、新歌では、天上の月の桂に咲く花も、地上と同様に雲のように見えるために、やはりこんなにも春には霞んで見えるのだろうか、という新味が詠出されている。照り冴える月と霞んで見える月の対照を、季節と季節を彩る花を軸にして反転させた所に、この一首の読み所を見出した解であると言える。「かやうに本歌をとるも一の様也」と述べるように、宣長自身は明確にこの種の本歌取を一つの類型として位置付けていることがわかる。

『美濃』においてこれと対応する解釈を示している例として、



## 題しらず

うらみずやうきよを花のいとひつ、さそふ風あらばと思ひける  
をば（春下・俊成卿女・一四〇）

## 本歌

わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ  
思ふ（古今・雑下・小野小町・九三八）

めでたし、本歌へわびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞおもふ、【中略】二三の句は、本歌のごとく、世をうき物に思ふ我心を以て、花の心をも思ひやりて、早く散行をも、うき世をいとひての故と、おもひなだめて、恨みざる、一首の趣をあらはしたり、四の句、本歌の水を風にかへたる、おもしろし、

本歌では、浮草が、水の流れに乗って流れて行く様が描かれており、新歌においてはその浮草を流す水が、「四の句、本歌の水を風にかへたる、おもしろし」というように花を散らす風に詠み換えられ、風が吹けば花が散るのは理であるので、恨まないのである、という読みを示している。『尾張』ではこの種の本歌取も認めていないようで、「本歌は詞計をとるなり。此説、いとむつかし。二三の句は、本歌のごとばにあらず。本歌は、たゞさそふ風あらば一句なり。すでに、本歌に拠なし。いかでか本歌のごとく云々と、とく事をえむ。すべて、この先生の本歌を、とりたる歌をとかる、なん、あやしく煩はしき」と述べている。

## (G) 本歌を二首取る本歌取

この本歌取はすでに一七九番歌、一二〇三番歌において見られたものである。ここではもう一首を載せるにとどめる。

## 千五百番歌合に

なげかずよ今はたおなじ名取川瀬々のうもれ木くちはてぬ  
共（恋二・藤原良経・一一一九）

## 本歌

名とり河せぜのむもれ木あらはれば如何にせむとかあひ見  
そめけむ（古今・恋三・読み人しらず・六五〇）

わびぬれば今はたおなじにはなる身をつくしてもあはんとぞ思ふ（後撰・恋五・元良親王・九五〇、拾遺・恋二・七六六）

二三四の句は、へ今はた同じ難波なる云々と、へ瀬々の埋木あらはれば云々とを、とり合せ玉へり、さて今はた同じとは、今も既にうき名をたてられたれば、朽はてたるも同じことぞといふ意なり、然れば此うへたとひくちはつても、歎きはせずとなり、

本歌二首によって、世間に浮名が流れてしまったこと（古今歌）、それは朽ち果てたも同然であること（後撰、拾遺歌）が詩的世界の背景状況として設定される。それを新歌では朽ち果てても歎くまい、と本歌の状況を前提とした心情を読み込んでいる、という意味で（C）本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取としての側面も持っていると言える。

## (H) 縁語的連想による本歌取

これは、先行する本歌取言説にも見出されない、宣長の本歌取に特徴的な解釈法であると考えられる。

土御門ノ内大臣、家にて梅香留袖

散ぬればにほひばかりをうめの花ありとや袖に春風のふく

（春上・藤原有家・五三）

## 本歌

折りつれば袖こそにはへ梅花有りとやここにうぐひすのなく  
(古今・春上・読人しらず・三三二)

めでたし、詞めでたし、二の句のをもし、なる物をといふ意なり、散ぬればとは、手折て持たる梅花の散しをいふ、さやうに見ざれば、袖にといふことよせなし、心をつくべし、手折持たることは、詞に見えねども、本歌にへをりつれば袖こそとあるにて、おのづからさやうに聞ゆ、かゝる所、此集のころの歌のたくみなり、本歌のとりざまおもしろし、

『美濃』は、「袖」に対する「よせ」の必要性から、「手折」という縁語関係を想定しようとする。そこで、新歌には詞としては出ていないものを、本歌では撰取されていない詞である「折つれば」から読み込んで、「梅花」を手で折って持つており、それが新歌初句に「散りぬれば」とあることによって散ってしまったのだ、という解釈をしていることが窺える。そのような技巧に関して、「かゝる所、此集のころの歌のたくみなり、本歌のとりざまおもしろし」と本歌取の巧みさに評価を与えているのである。

以降の例は、本歌から撰取した詞と新歌において新たに詠み出された詞との間に縁語関係が成立しているものと見るものとなるが、この五三番歌における縁語関係を読み込む本歌取は、縁語の関係が、新歌には詞として表れぬ本歌のものでも、縁語関係を成立させ得るという宣長の特徴的な解釈態度が示されている。

露はらふ寐覚は秋の昔にて見はてぬ夢にのこるおも影(恋四・俊成卿女・一三二六)

## 本歌

涙河ながすねざめもあるものをはらふばかりのつゆやなになり  
(後撰・恋三・読人しらず・七七二)

いのちにもまさりてをしある物は見はてぬゆめのさむるなり  
けり(古今・恋二・壬生忠岑・六〇九)

いとめでたし、詞めでたし、露はらふは涙にて、露といへるは、秋の縁なり、秋の昔とは、秋は人にあかれたる今のことにて、其今よりいへば、いまだ人のかはらで、逢見しことは、昔なるよしなり、然らばたゞむかしにてとのみいひてもよかるべきに、秋のといへるは、いかにといふに、此歌にては、秋のといふことなくては、逢見し事は昔にて、今はあかれたる意、あらはれがたければ也、一首の意は、人にあかれ忘れられたるころ、夢に又逢と見たるが、見はてもせず、早くさめたる時によめる意にて、其夢さめたれば、もとのあかれたる時にて、夢に見たる逢事は、昔のことにて、たゞ其夢の面影のみ残りて、涙をながすとなり、此歌を、契沖が、女の歌めかずといへるは、いと心得ず、【後撰へはらふばかりの露や何なり、古今へ見はてぬ夢の覚る也けり】

これは、先行注において指摘されなかった歌を本歌とする例である。後撰集本歌の「露」を受けて、新歌では「秋」を縁語として指摘している。その「秋」が「飽き」と掛かり、「秋／飽き」が来る前の昔のことを夢に見たが、最後まで見終わる前に目が覚めて、夢が昔の事であったことを悟り、涙を流すという解を導く。

## 五十首歌奉りし時

暮てゆく春のみなどはしらねども霞におつる宇治のしば船(春下・寂蓮・一六九)

## 本歌

年ごとにみちばながす竜田河みなとや秋のとまりなるらむ  
(古今・紀貫之・秋下・三二一)

春のみなとは、春のゆきとまる所をいふ、<sup>云々</sup>みなとや秋のとまりなるらむより出たり、船に縁あることなり、下句は、川瀬も何も見えず、立こめたる霞の中へ、くだりゆく柴舟の、ゆくへもみえぬを、くれてゆく春によそへて、ながめやりたる意なるべし、

「みなと」を本歌の詞から切り出して、新歌において「宇治のしば船」との縁語関係を成立させようとする解釈である。

#### 七夕のうた

たなばたのとわたる船のかぢのはにいく秋かきつ露の玉づさ

(秋上・藤原俊成・三二〇)

#### 本歌

あまのがはとわたるふねのかぢのはにおもふことをもかきつくるかな(後拾遺・秋上・上総乳母・二四二)

初二句は、題の事を、すなはち序にしたる也、露の玉、梶の葉に縁あり、後拾遺に、<sup>云々</sup>天川とわたる船のかぢのはに

本歌における「梶の葉」という詞を撰取した上で、その縁語となるべき「露の玉」を詠み込んだとする評釈であると言えよう。

ここで、逆の側から、この縁語的連想による本歌取を立項すべき例を見ることとする。

#### 百首歌奉りし時

夏衣かたへすゞしくなりぬなり夜やふけぬらん行合の空(夏・慈円・二八二)

#### 本歌

夏と秋と行きかふそらのかよひぢはかたへすゞしき風やふくらむ(古今・夏・凡河内躬恒・一六八)

本歌「夏と秋と行かふそらの通路は<sup>云々</sup>、本歌とれる詮なし、たゞ夏衣といへるのみ、かはれる、その夏衣も、縁の詞だになければ、いたづらことなり、

「本歌とれる詮なし」と述べ、「夏衣」と言うならせめて縁の詞を配置すべきであるという注文をつけている。この用例からは本歌から撰取した詞に、新歌で縁語を配することで「本歌とれる詮なし」となることなく本歌取歌として成立し得るという理路が想定されていると言えるだろう。

#### (1) 本歌の詩句と変わらない本歌取

『玉箒』における本歌取解釈を分析した際には「本歌の趣向を変えない本歌取」という項目名としていたものである。『美濃』の分析においては正明の「詞を取る本歌取」という重要な観点が追加されるので、「本歌の趣向を変えない本歌取」と「本歌の詞のみを取る本歌取」を一つの項目として立項し、以上のような項目名とする。

この規定は「心を取る本歌取」を重視すると考えられている宣長からすると、およそ認められ得ないような本歌取である。先に述べたようにここに含まれる本歌取の一つには「本歌の趣向を変えない本歌取」であり、もう一つは正明が再三述べるような「本歌の詞のみを取る本歌取」である。これまで見てきた通り宣長のように「心を取る本歌取」であれば必然的に本歌と新歌の間で、詩句レベルまたは一首のレベルにおいて意味変化が生じるものである。本歌取という技法を、模倣を介した創作であると考えた場合には、右の二つの本歌取はそもそも本歌取の規定から外れるようなものでもある。そのような本歌取に対して宣長がどのような態度を示しているのかを把握することは、彼の本歌取観全体にとって極めて大きな意味を持つはずである。

まずは詞のみを取る本歌取について。

## 山家松

今はとてつま木こるべき宿の松千代をば君となほいのるかな  
(雑中・藤原俊成・一六三七)

## 本歌

すみわびぬ今は限と山ざとにつまぎこるべきやどもとめてむ

(後撰・雑一・在原業平・一〇八三)

ゝ住わびぬ今はかざりと山里につま木こるべきやどもとめてむ  
といふを本歌にて、詞ばかりをとりて、意は、これは既に山住  
しての歌也、我<sup>ガ</sup>よはひも老て、末のほどなければ、屋戸の松も  
残しおきて用なければ、今はつま木にこるべきなれども、さは  
せず、猶のこしおきて、此松の千世を、君がよはひにと祈ると  
なり、

ここで宣長は「詞ばかりをとりて」と、詞だけを取る、ということ  
を明言している。その本歌取としての意味するところは評釈のみから  
は必ずしも分明ではないが、視点の変更や詩的世界の連続という観点  
のない解を示していることは確かである。これに対して『尾張』は、「す  
べて古歌をとるは、古歌の詞ばかりを取るものなる事、つぎ／＼いへる  
がごとし」と述べ、これこそが本歌取の方法であることを再度主張し  
ている。『尾張』の認識としても明らかに詞だけを取っている例である。  
また本歌の趣向を変えない本歌取についてはどうであろうか。

## 千五百番歌合に

言の葉のうつりし秋も過ぬれば我身しぐれとふる涙かな(恋四・  
源通具・一一一九)

## 本歌

今はとてわが身時雨にふりぬれば事のはさへにうつろひにけり  
(古今・恋五・小野小町・七八二、伊勢物語・一二一段)

ゝ今はとて我身しぐれとふりぬればことの葉さへにうつろひに  
けり、という歌をとれり、然るにたゞ涙をいへるのみにて、其  
外は本歌にさのみかはることもなきは、いかにぞや、そのうへ  
秋も過ぬればしぐれとふるといふこと、時節の次第はさること  
なれども、たとへたる恋の意のかたは、過ぬればといへるは、  
なにのよしぞや、上句ゝ言の葉もうつろふ人の秋ふけて、など  
こそあらまほしけれ

古今七八二番歌を本歌として取っているが、「涙」を加え、詞だけ  
を変えただけで、趣意を変えないことが本歌取の技法として批判され  
ている。なお、本歌の古今歌の解釈は『遠鏡』を参照すると、

ワシガフルウナツタレバ モウイヤト思召テ マヘカタオツツ  
シヤツタ御約束ノ御詞マデガチガウテ参ツタワイナ 時  
雨は、ふりといひ、又ことのはうつろふといはむ料なり、

とあり、老いて変わった自分を見捨てたあなたが昔私に約束した言葉  
も変わってしまった、という趣意としての解釈である。

さらに「秋が過ぎてしまった」という「秋」で「恋」を譬えている  
が、「恋も過ぎぬれば」という言い方を「なにのよしぞや」と批判し  
ている。その上で、「言の葉もうつろふ人の秋ふけて」という改作案  
を提示している。この改作では、本歌の「うつろふ」が用いられ、ま  
た「秋」に「飽き」が掛けられた上で、それが「ふける」と改変する  
ことで「恋」との互換を必要とせずに、恋が終わったことを表す表現  
となっている。

## (J) 撰取されていない本歌の詞を読み込む本歌取

ここで最後に立項するものは、『玉簪』における本歌取の分析から  
は見出されなかったタイプのものである。本歌からは撰取されていな  
い詞が、新歌において積極的な意味作用を見出される本歌取解釈で



あつて、「心を取る本歌取」としては最も適合するようなものであると言える。具体例に即して見てみよう。

#### 河霧

明ぼのや川せの波のたかせ船くだすか人のそでの秋霧（秋下・源通光・四九三）

#### 本歌

あけぬるかかはせのきりのたえだえにをちかた人のそでのみゆるは（後拾遺・秋上・源経信母・三三四）

めでたし、下句詞めでたし、二三の句は、船をくだせば、船にあたる波の音の高さをいふ、人の袖の秋霧とは、経信卿母の歌に、<sup>へ</sup>明ぬるか川せの霧のたえぐに遠方人の袖の見ゆるは、とあるをとりて、花やかによみなせる也、されば此句は、袖のたえぐに見ゆる意なるを、其詞をば、本歌にゆづりて、人の袖のといふ詞にて、本歌を思はせたる物なり、然るを或抄に、袖は霧にかくれてあるといふことなりと注せるは、いとをさなし、一首の意は、波の音高く聞え、又霧に人の袖のたえぐ見ゆるにつきて、高瀬舟をくだすにやと思へるさまなり、

「其詞をば、本歌にゆづりて」と表現しているように、直接は摂取されていない本歌の詞を読み込んでいることを示す評釈である。本歌から摂取した「人の袖」と言うことで、新歌では詞としては現れない「たえぐ見ゆる」が連想され、そのまま新歌の意味内容として読み込まれるのである。宣長は新歌を、波が船に当たる音を聴覚的に捉え、また霧の合い間から時折見える袖を視覚的に捉えたことから、高瀬舟が下っていることを推量する歌とする。

#### 大神宮に奉り給ひし夏ノ歌の中に

ほと、ぎす雲井のよそに過ぬなりはれぬ思ひの五月雨の比（夏・

#### 後鳥羽院・二二六

#### 本歌

秋霧のともにたちいでてわかれなばはれぬ思ひに恋ひや渡らむ（古今・離別・平元規・三八六）

本歌「秋ぎりのともに立出てわかれなばはれぬおもひに戀やわたらむ、四の御句は、五月雨のはれぬをかねて、本歌のこひやわたらんの意をもたせて、よそに過ゆきし時鳥を、こひやわたらむとなり、

本歌第四句の「はれぬ思ひ」は、「五月雨」が「はれぬ」を兼ねながら、結句の「恋やわたらむ」を連想させ、その意味内容が、「よそに過ゆきし時鳥を、こひやわたらむ」のように読み込まれる、と解釈するのである。これに対して『尾張』は「本歌は詞ばかりをとれり。取のこしたる詞は此哥に用なし」と述べ、一首の趣意を「五月雨の比、はれせぬ物おもひをしてをれば、時鳥が遠かたを啼て過行となり」とすることで、『美濃』が読み込んだ「恋やわたらむ」を拒否する。「心を取る本歌取」と「詞を取る本歌取」とが明確に対立する評釈である。

#### 千五百番ノ歌合に

久かたの中なる川のうかひぶねいかにちぎりてやみをまつらん（夏・藤原定家・二五四）

#### 本歌

久方の中におひたるさとなればひかりをのみぞたのむべらなる（古今・雑歌下・伊勢・九六八）

一二の句は、<sup>云々</sup>久かたの中におひたる里なればの意にて、桂川なり、此川は、月の中なる川にて、その光をのみ頼むと、本歌によめるに、うかひぶねは、いかなる契にて、闇を待てかふぞと也、四の句は、俗にいかなる因縁にてといふ意なり、

本歌の「久方の中」から下の句「ひかりをのみぞたのむべらなる」がまず連想される。新歌ではそのことが前提となつて、それにも関わらず「うかひぶねは、いかなる契にて、闇を待てかふぞ」と解釈されるのである。この宣長の読みに対して正明は、一首の趣意には同意しつつ、本歌の取り方に関しては「本歌のとりやうむつかし。本歌はたゞ一二ノ句の出所也。さて三ノ句の下に月の光をたのむべきをと云詞そへてみるべし。本哥によりてしかるにはあらず。下の句より出来る趣なり」とやや苦しい主張をしている。ここに至ると正明こそが「詞を取る本歌取」に固執しているように思われる。

以上見てきたように、『美濃』における宣長の本歌取の解釈方法は多様であり、それを本稿では

- (A) 本歌の詞の意味内容を変容させて新歌に利用する本歌取
  - (B) 本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取
  - (C) 本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取
  - (D) 本歌に応和する本歌取
  - (F) 本歌の詞を同系統の別の詞に置き換える本歌取
  - (G) 本歌を二首取る本歌取
  - (H) 縁語的連想による本歌取
  - (I) 本歌の詩句と変わらない本歌取
  - (J) 撰取されていない本歌の詞を読み込む本歌取
- のように細分化して分析してきた。それでは、本居宣長の古典解釈態度を明らかにするという目的において、この本歌取の解釈方法の解明はいかなる意味を持ち得るのであるのか。

### 三、本居宣長本歌取論の古典解釈一般に占める位置

#### 三・一、過度な論理的・一貫性という評価への反例

##### — 心と詞の対立軸から

かつて拙稿において宣長の古典解釈態度に関する評価には、過度の

論理的一貫性を主張する立場と、解釈上の柔軟性を主張する立場の対立が存在することを指摘した。しかし圧倒的多数派は前者の評価を以て宣長の古典解釈態度ないし思考法を位置付けるものであった。改めて本稿の主題に近い研究からその評価を一瞥すると、野口武彦による

われわれが見出すのは、一方における宣長の言葉の論理的運用への特殊な執着であり、他方における「景気」への無感覚なのである<sup>7)</sup>。

や日野龍夫の

常識や慣例よりも論理に従うという宣長の面目が躍如とするのは過去の助動詞が用いられていない表現に対して、文脈上すこしでも現在の出来事と解する余地があれば、たとえ歌の情緒を損なうとも、現在の出来事と解してしまおうとする姿勢である<sup>8)</sup>。

などが挙げられよう。また『遠鏡』の俗語訳の分析から宣長の注釈態度一般の性格を探ろうとした田中康二も

人は物を見るとき、多少なりとも対象を歪めて見ている。おそろくそれが理解するというこの本質であろう。したがって、宣長の『古今集』理解が誤解を含むのは必然である。むしろ問題なのは、常によれない虚像を映そうとする宣長の信念である。それは『遠鏡』に限らず、宣長の注釈に常に付きまとう問題である<sup>9)</sup>。

という評価を下している。

しかしながら『美濃』の本歌取解釈という観点から多様な解釈の諸相を抽出してきた本稿の評価は当然ながらこれとは異ならざるを得ない。本稿の冒頭で本歌取解釈の大枠として示した宣長の「心を取る本

歌取」と正明の「詞を取る本歌取」という対立軸にさしあたり依拠するとしても、『美濃』における宣長の「心を取る本歌取」の方法は、(J)撰取されていない本歌の詞を読み込む本歌取を最も象徴的な方法としながら、(A)本歌の詞の意味内容を変容させて新歌に利用する本歌取、(B)本歌と同一の歌境を新たな視点から捉える本歌取、(C)本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取、(D)本歌に応和する本歌取、(F)本歌の詞を同系統の別の詞に置き換える本歌取、といった多様性を持っている。むしろこれらに対してその都度「詞を取る本歌取」という画一的な解釈を主張している正明の解釈態度がより、過度な論理的―一貫性を和歌解釈において当てはめようとしているように思われる。

さらに先の対立軸において「詞を取る本歌取」の側の解釈をも宣長は認めていることが特に(1)本歌の詞と変わらない本歌取を評釈中に見出せることで示された。確かに宣長の大部分の本歌取解釈は「心を取る本歌取」であると言え、その意味では本歌取の本質理解に関する主張を一貫させているという評価が可能となりそうである。しかしながら正明との解釈上の対立としてあった一方の「詞を取る本歌取」を宣長は排除しているわけではないのであり、本論ではこの宣長の姿勢に解釈の柔軟性という評価を与えようとするのである。

例えば(G)本歌を二首取る本歌取それ自体は形式的な規定としての本歌取であって、内容面で本歌の解釈を規定するものではないが、『美濃』における最初の本歌取歌としての

百首／歌奉りし時

谷川のうち出る波も聲たてつうぐひすさそへ春の山かぜ(春上・

藤原家隆・十七)

本歌

谷風にとくるこほりのひまごとにうちいづる浪や春のはつ花

(古今・春上・源当純・十二)

花のかを風のたよりにたぐへてぞ驚さそふしるべにはやる(古

今・春上・紀友則・十三)

めでたし、下句詞めでたし、本歌「谷風にうち出る浪や云々、  
「風のたよりにたぐへてぞ驚さそふしるべにはやる、波もこゑ  
たてつるほだに、驚をもさそひて、聲たてさせよと、山かぜに  
いへるこゝろなり、

について『尾張』では、「梅が香を風の便にたぐへてぞ云々、といふ  
は本歌の詞ばかりをとれり。これつねの事也。先生は本歌の如く云々  
といはる、例なるに、こゝは然らず。」と述べているように、「詞を取  
る本歌取」として宣長が解釈していると考えられているものもある。

### 三・二、詞の秩序の重視―心を取る本歌取と縁語的連想 による本歌取を通して

本稿における『美濃』の本歌取解釈方法の検討が宣長の古典解釈一  
般に対して持ち得る意味の第二は、先行研究でも頻繁に言及される宣  
長における詞の秩序の重視である。先にも引いた野口による宣長の定  
家歌改作問題における主張を見よう。先に新古今四〇番歌とその改作  
例を挙げる。

大空は梅のにほひにかすみつ、くもりもはてぬ春の夜のつき  
(春上・四〇)

或人の云、  
大空はくもりもはてぬ花の香に梅さく山の月ぞか  
すめる

宣長が「梅」を朧月夜のたんなる点景としかとらえず、いわば  
嗅覚的想像力のはたらきを非常に貧しいものにしてしまってい  
ることは明かだろう。宣長がこの注釈の中でもっとも力を入れ  
ているのは、言葉と言葉との呼応であって、言葉の感覚性は二  
の次にされている、とさしあたりは言っておくことができるよ  
うに思われるのである<sup>10)</sup>。

またさらに冒頭で挙げた高橋にも同様の評価が見られる。

和歌の論理的構成に必要な条件とされるテニヲハや縁語等の「詞のつづけがら」に注意しさえすれば、そこに風雅な景気をもった和歌が成立すると宣長は考えていたのではないか<sup>1)</sup>。

そして『美濃』の縁語表現に着目した研究として宣長の解釈態度に関する評価を導いた渡部泰明も次のように述べている。

宣長には、言葉の秩序に対する強い志向が感じられる。一回的な統語の上でも、また伝統との呼応の点でも、相互に必然化されているような言葉の秩序が必ずやあって、言葉との苦闘の果てに、そこに我が心が吸収されていくとき、宣長はそこにある種の理想的な状態を垣間見たのではないだろうか。

本居宣長の『新古今集』理解は、当然ながら彼自身の思想に染められている。言葉の秩序の存在を前提とするというフィルターが掛かっている。だからこれを、『新古今集』の言葉の実態と同一視するわけにはいかない。しかしまた、無関係ではもちろんない。彼の和歌観そのものが、中世和歌への深い沈潜から生成したものにほかならないからである<sup>2)</sup>。

本稿で見出したものは大枠で言って「心を取る本歌取」としての宣長の本歌取解釈の態度であり、また特に宣長に特徴的な解釈としての(H)縁語的連想による本歌取や(J)撰取されていない本歌の詞を読み込む本歌取、という解釈方法であった。

「心を取る本歌取」が示しているのは、本歌取歌としての新歌が、和歌の伝統において先行する本歌の網目の中にしっかりと位置を占めているという宣長の意識であろう。本歌と新歌は表面上の詞のみの共通性を有しているというだけでなく、内在的に連なっているという

読みが、特に(C)本歌の詩的世界に依拠しつつ展開を加える本歌取と(J)撰取されていない本歌の詞を読み込む本歌取の方法に如実に表れていた。

そして(H)縁語的連想による本歌取を本歌取歌読解における有意味な方法論として宣長の解釈の中から引き出されたことは、先に引いた諸先行研究における「詞の呼応」や「詞のつづけがら」、すなわち詞の秩序において縁語が決定的な役割を果たしていることを思うとき、宣長における詞の秩序の重視という解釈態度を本歌取論という領域から傍証し、かつその内実をより詳細に解明し得ることに繋がるであろう。右の結論を具体的に支持する宣長の評釈を見よう。

和歌所にてをのこども旅の歌つかうまつりけるに

袖にふけさぞな旅ねの夢もみじ思ふかたよりかよふ浦風(羈旅・藤原定家・九八〇)

本歌

恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらん  
(源氏物語・須磨)

めでたし、さぞなどは、夢もえ見ざらむことを、かねておしはかりていふなり、さて夢の見えんにこそ、風をもいとふべけれども夢は見ゆまじければ、思ふかたより吹来る風なれば、我袖にふけとなり、浦といへる、縁なきがごとし、山にても野にても同じ事なれば也、但し須磨ノ巻に「戀わびてなくねにまがふ浦なみは思ふかたより風やふくらむ」とあるにより玉へるなるべし、

宣長は評釈の中でまず一首の意を本歌によらず、完結したものとして説いた後に、「浦」に縁がないことに疑念を示している。源氏須磨巻「戀わびてなくねにまがふ浦なみは思ふかたより風やふくらむ」を本歌として要請することで、新歌の「浦」は「本歌」からは直接撰取



されていない「波」との縁語関係を獲得し、問題は解消されると見ているようである。すでに、一首の意は、本歌に拠らずに説かれているために、この本歌の詞は、単に縁語関係のためだけに要請されているとみるべきであろう。

以上により、(J)撰取されていない本歌の詞を読み込む本歌取が、(H)縁語的連想による本歌取のために用いられているとみなすことができる。このような複雑な経路を経て、宣長はこの九八〇番歌に詞の秩序を見出そうとするのである。

#### 四、結論

本稿では『美濃』の評釈に見出せる本歌取に対する多様な解釈の内実を記述するとともに、そのことが宣長の古典解釈において持つ意味を考察してきた。ここで最後に注記しておきたいことがある。今まで本稿では宣長の本歌取に解釈の柔軟性を見出す方向で議論を進めてきた。それは第三節第一項で述べたように、これまでの先行研究における宣長の古典解釈に対する評価が過度の論理的・一貫性という性格規定に大きく傾いており、そのことへの反例を示すためであった。しかしながら本稿が向かうべき目標は、宣長の古典解釈を柔軟性という側のみで捉えるということではない。すでに述べたように、宣長の本歌取解釈は大枠としては「心を取る本歌取」という論理で読み解くこともできるからである。

それゆえ以上の議論を踏まえて問われるべきは、宣長の古典解釈において論理的・一貫性と柔軟性とを共に見出した上で、その両者がどのような導き出されているのか、両者はどのような関係にあるのかである。すなわち、宣長の古典解釈態度を論理的・一貫性か柔軟性かの一方に帰属させるという水準に留まるのではなく、その両者を含み込むものとして宣長の古典解釈を捉えるための視座の獲得を目指す必要がある。

#### 【引用本文、及び注釈書】

草庵集玉簪…『本居宣長全集 第二巻』（筑摩書房・一九六八年）  
愚問賢注…小川剛生校注『歌論歌学集成 第十巻』（三弥意書店・一九九九年）

美濃の家づと…『本居宣長全集 第三巻』（筑摩書房・一九六九年）。なお適時、『新古今集古注集成 近世新注編1』（笠間書院・二〇〇四年）を参照。

尾張廻家苞…寺島常世校『新古今集古注集成 近世新注編2』（笠間書院・二〇一四年）

古今集遠鏡…今西祐一郎校注『古今集遠鏡』1・2（平凡社・二〇〇八年）

本歌として提示した和歌は新編国歌大観に従った。

窪田空穂『完本新古今和歌集評釈』上巻・中巻・下巻（東京堂出版・一九六四—一九六五）

久保田淳『新古今和歌集全注釈』第一巻—第六巻（角川学芸出版・二〇一一—二〇一二年）

#### 注 釈

1 高橋俊和「和歌のしたてやう」『本居宣長の歌学』（和泉書院・一九九六年・八五頁）

2 寺島恒世「気韻の和歌 新古今注『尾張廻家苞』の要諦」（鈴木健一編『江戸の「知」——近世注釈の世界』森話社・二〇一〇年・三二頁）調査の対象とした歌論、歌学書は以下の通りである。鴨長明『無名抄』、順徳天皇『八雲御抄』、藤原定家『詠歌大概』、偽藤原基俊『悦目抄』、二条為世『和歌庭訓』、頓阿『井蛙抄』、『愚問賢注』、東常縁『東野州聞書』、細川幽齋口述、烏丸光広筆録『耳底記』、偽藤原定家『和歌手習口伝』。なお、「宝暦二年以降購求謄写書籍」及び「書目」には見えないものの、本歌取言説において最重要の位置を占める、藤原定家『近代秀歌』（偽）藤原定家『毎月抄』における言説も、参考のために付す。図表における各歌論歌学書の略省記号は、先に掲

3

渡部泰明「本居宣長と『新古今集』」(『中世和歌史論 様式と方法』  
岩波書店・二〇一七年・四四八―四四九頁)